The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アレクシス・ライト『地平線の叙事詩』 : 先住民文学と難民文学をつなぐ水平（地平）線
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 47-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アレクシス・ライト『地平線の叙事詩』

――先住民文学と難民文学をつなぐ水平（地平）線――

小 杉　世

１．はじめに

この原稿は「書評」のようなものとして書く心づもりをしていたが、標記の翻訳本[1]が執筆時点で発行されていないため、実際に手にとって、日本語翻訳版の解説などを読んだ上で原稿を書くことができなかった。アレクシス・ライト (Alexis Wright) の『地平線の叙事詩』の原題は ‘Odyssey of the Horizon’ であり、 2017 年に開催されたヴェネツィア・ビエンナーレのオーストラリア部門の作品として選ばれたトレイシー・モファット (Tracey Moffatt) の展示 *My Horizon*[2]の大型カタログ図版本におさめられた短編である。筆者はこの展覧会を見ることはかなわず、キュレーターのナタリー・キング (Natalie King) が編集したカタログ図版本で読んでいる。ヴェネツィア・ビエンナーレには、これまでもニュージーランド在住のサモア人舞台芸術家レミ・ポニファシオや日系サモア人のアーティストであるユキ・キハラなど、オーストラリア・ニュージーランドからのアーティストが参加してきた。トレイシー・モファットはブリズベン生まれのアボリジナルのアーティストであり、写真や映像作品で知られる。本稿では、モファットの *My Horizon* と、アレクシス・ライトの短編 ‘Odyssey of the Horizon’、および、ライトの新作長編小説 *Praiseworthy* (2023) について、紹介したい。

２．インスタレーション・アートにおける難民表象

昨年のプロジェクト論文（小杉 2022）のなかで筆者は、エリザベス・デロリー (Elizabeth DeLoughrey)が『人新世のアレゴリー』(*Allegories of the Anthropocene*, 2019) で論じたドミニカ共和国のアーティスト、トニー・カペラン (Tony Capellán) の廃物を利用して制作した「カリブ海」(‘Mar Caribe’) をはじめとする一連のインスタレーションがカリブ地域における難民収容の問題や看守による難民のレイプなどの社会問題を呈示していることにふれ、オセアニアにおける「パシフィック・ソリューション」とよばれたオーストラリアの難民政策との関連性に言及した。カペランの廃物利用のインスタレーションは、先進国の作り出すプラ

---

[1] アレクシス・ライト『地平線の叙事詩』有満保江訳（現代企画室、2023 年）。6 月に現代企画室が出版記念講演会を企画している。

[2] ‘Tracey Moffatt, *My Horizon*, Venice Biennale 2017’ (https://www.youtube.com/watch?v=WBhOFp_wF8c), accessed 31 March, 2023.

スチックゴミなどの廃物が第３世界の環境を侵害すること、地球温暖化の影響で被害がより大きくなる川の氾濫によって、川の流域の貧しい民家が浸水して生活の遺物が下流の海岸に堆積すること、また、一見存在しないかのように見える境界線が海にも存在すること(DeLoughrey 105)、有刺鉄線に象徴される国家権力によってからめとられ排斥され「廃物」化される存在といった多重なメッセージがこめられている。[3]

小説家のアレクシス・ライトもまた『カーペンタリア』(*Carpentaria*, 2006) や『スワン・ブック』(*The Swan Book*, 2013) など、これまでの長編小説のなかで、「廃棄物」あるいは「廃物」化される存在をよく描いてきた（Kosugi 2018、小杉 2018、2019）。

３．ティモシー・モファット *My Horizon* と冒頭詩「ホモ・サケル」

キュレーターのナタリー・キングが編集したモファットの *My Horizon* のカタログ図版本は、写真と映像からなる 4 つの展示 ‘Body Remembers’、‘Passage’、‘Vigil’、‘The White Ghosts Sailed In’ のセクションからなり、複数のアーティストや作家、詩人が文章を寄せている。‘Passage’ には赤ん坊を抱く黒人女性の写真が、また、‘Vigil’ には難民を満載したボートが難破する瞬間をみまもる複数の白人ハリウッド俳優たちの表情を映した映像作品が、そして最後の ‘The White Ghosts Sailed In’（これも展示は映像作品） には、アレクシス・ライトの ‘Odyssey of the Horizon’ がおさめられている。

カタログ図版本の冒頭には、アボリジナルの詩人 Romaine Moreton の詩「ホモ・サケル」(‘Homo sacer’) が掲載されている。‘My people are buried here Beneath the cracked earth of the clay pan’ という詩行で始まる 18 行からなるこの詩は、最初の 6 行で ‘My people are buried’ という表現をたたみかけるように繰り返し、この土地にドリーミングの時代から生きてきた先祖、また植民地化の歴史のなかで命を失った何世代ものアボリジナルたちの存在を想起させる。7〜8 行目の ‘My people Home of the sacred/ Homo sacer Staring through the Horizon’ では、先祖たちの眠る「聖なる土地」(Home of the sacred) に根差して生きてきた ‘My people’ を「北極と北極星をこえて再び南へとのびる」「地平（水平）線の向こうをみつめるホモ・サケル（聖なる人間）」とよぶ。太陽の光にさらされた剥き出しの肌 (‘Our bare skin/ This sun-kissed life’) の「聖なる人間」が、「よその土地からやってきた幽霊たち」(‘Ghosts from another land’)、「銃を手に持ち」(‘Gun in hand’)、「私たちの海岸に難破した」(‘Shipwrecked upon our shore’) 白人たちによって、なきものにされ、「今や剥き出しの生」(‘Now bare life’) を生きる存在、「ホモ・サケル」(‘homo sacer’) に転じてしまったという歴史的推移の皮肉をうたっている。

この詩は、アボリジナルのガラス・アーティストのイワニ・スケース (Yhonnie Scarce) の作品に表象される植民地主義の暴力にさらされてきたアボリジナルの存在と重なる。[4] そし

[3] Tony Capellán, ‘Poetics of Relation’ (https://www.youtube.com/watch?v=zT5WnhJqx9A), accessed 25 March, 2023.

[4] 小杉世「帝国のホモ・サケル―太平洋核実験をめぐる当事者性と芸術の想像力」（2023 出版予定）、および小杉 (2016)で論じている。イワニ・スケースの新作「オーフォード・ネス」（国際芸

てまた、カタログ本の最後のセクション‘The White Ghosts Sailed In’におさめられたアレクシス・ライトの‘Odyssey of the Horizon’のテーマ、白人たちの到来をアボリジナルがどう受け入れたかと関連してくる。

４．アレクシス・ライト「地平線の叙事詩」（‘Odyssey of the Horizon’）

ライトのこの短編は、白人たちが到来する以前のシドニー湾の海岸に打ち寄せる嵐の波の描写と、白人たち（‘the white ghosts’）の到来に怯えて海岸を叫びながら駆け巡る風の精霊（‘[t]he old wind spirit guarding the coastline’ 114）の描写から始まる。ライトは長編小説『カーペンタリア』の冒頭において、虹蛇が大地に下り、蛇行する川をつくる壮大なアボリジナルのコスモロジーを描いたが、6 節からなるこの短編小説もまた壮大な広がりをもつ。アボリジナルの神話的世界観が、古代ギリシャの海や風をあらわす神々をはじめとして、世界の諸文化の神話とつながりをもつ点や、古代から現代まで世界の様々なところで起こってきた人間の移動[5]、鳥や昆虫など小さな生きものたちを描く点でも、長編小説『カーペンタリア』や、人間の難民だけでなく、気候変動の影響で生息地を失ってアボリジナルの住む核汚染された沼に降り立つ黒鳥の群を描いた前作の長編小説『スワン・ブック』などとも共通する。

下記の引用は短編の第 1 節‘the old wind’の冒頭である。

> The waves you see will continue to heave and wash away boundaries of imagined borders, and mighty storms of the times will erode and break down the walls we build in our minds to imprison ourselves, just as the barricades erected with steel and barbwire to keep other people out will be broken. There are no boundaries in the ocean’s currents stirring the waters. . . . We breathe air mingled with the breath of others. . . .　(‘Odyssey of the Horizon’, 114, 下線は引用者)

『カーペンタリア』の結末のサイクロンは、愚かな確執を繰り返す白人たちの住む町もその周縁のアボリジナルの集落も等しく洗い流してしまうが、上記の引用においても、嵐で空と海、海と陸の区分がなくなる原初の混沌のような自然は、「境界線」や「壁」や「有刺鉄線」のバリケードで、他者を締め出そうとする、あるいは狭い心のうちに自分自身を閉ざそうとする人間の営みを無化するものとして描かれる。

第 2 節‘of belonging to Country’において、語り手は次のよういい問いかける。

> Would these people, in this first contact with the white ghost people, have gathered together in a huddle of bullies hell-bent on out-bullying each other in order to form an operation sovereign border policy, and prepared for war with the invaders by carving a million spears for a million warriors, or built a

術祭「あいち 2022」）については一谷智子が『南半球評論』第 38 号の編集後記でふれている。

[5] ナタリー・キングは、この展示が‘the timeless narrative of forced migration’ (*My Horizon*, 8) を想起させると序文で書いている。

> stone wall around the entire country to imprison themselves by keeping everybody else out? Or else created off-shore detention camps in a poor neighbouring country for locking up these boat people for the rest of their natural lives? No. . . . perhaps [they] sought knowledge, reciprocal understanding to uphold their ancient laws, to keep the country alive, to keep it from becoming dangerous. (115, 下線は引用者)

上記引用の下線部は、経済援助と引き換えに、周辺国パプアニューギニアのマヌス島やナウルの収容施設に難民収容を請け負わせるオーストラリアの難民政策（パシフィック・ソリューション）を批判している。その批判の根底には、先住民でありながら、自分たちの国のなかで土地を奪われ、また、「盗まれた世代」のハーフカーストの子供たちが、施設に収容され自らの根差す文化や土地や家族から隔てられて育ったというアボリジナルたちが体験した植民地主義の暴力の歴史に対する批判と、「難民」扱いされる存在への共感がある。

「白い幽霊たち」の最初の到来後に入植者たちが押し寄せ、「侵略」がとどまることはなく、アボリジナルたちが「影の人々」(‘shadow people’ 115) になる過程を描くが、同時に語り手は、船に満載されこの流刑植民地に送られた人々の多くがわずかな罪を犯したために流刑となった余剰人員であること (‘a lot of poor souls convicted of some crime, mostly petty’ 115) にもふれており、後半の現代の難民の姿とも重なる。

第 3 節 ‘the memory of reeds’ では、入植者からアボリジナルたちが受けた暴力が生々しく語られ、目の前で夫を殺され、子供を抱いて逃げるアボリジナルの女性の逃避行が描かれる。その女性はかつてイタリア半島北部からアドリア海のヴェネツィアの湿原に逃げ込んだ人々(‘war-torn people’ 117) の姿に重ね合わせられている。

> She carried her baby away, as she ran blindly through the swamp lands to escape, just like those frightened people, running for their lives, had once followed their Neptune sea God among the salty marshes of the Adriatic Sea, and hidden in the small islands among the channels and shoals of a Venetian lagoon, where they lived like birds on platforms of wattle and the shoots of the sallow tree. (117)

第 4 節 ‘the swallows’ house’ では、モファット展示の ‘Boddy Remembers’のセクションの写真と呼応し、おそらくは「盗まれた世代」のハーフカーストのアボリジナル女性と思われるかつて「馬の背に乗せられて」白人たちのもとに連れてこられた女性が、キッチンの窓から地平線を眺める様子が語られる。第 5 節 ‘where a nightingale sings’ は、展示の‘Passage’のセクションの赤ん坊を抱く黒人女性の写真、そして展示の‘Vigil’のセクションの難民船の難破の映像とゆるやかに関係する。兵士に道端でレイプされてできた赤子を抱いて砂漠をこえ、やっと港に行きついて難民船に乗り込む瞬間の（そして船が転覆し暗い水に沈む瞬間の）黒人の母親の心情が母親の視点と、男の子の赤ん坊の視点から情動的に語られ、ナム・リー

の『ボート』におさめられた最後の短編 'The Boat'などの様々な難民文学を連想させる。多くの故郷を失った人々 ('tens of thousands of the world's displaced people' 119) が地平線や水平線を超えて、生を求めてさまよう様子に焦点をあてるこの短編は、先住民のアボリジナルと世界の様々な難民たちの生をつなぐ文学となっている。

最後の第 6 節 'the vigil' は、それらの人々がどんな人たちであったのかを想像することを読者にいざなう('What were their names? Who were they? It makes you wonder' 120)。しかし、そのあとに続くパラグラフでは、冒頭に出てきた「壁」や「有刺鉄線」で他者を締め出す人間の警戒心を 'we'という主語を用いて再び語る。

> . . . Walls of barbwire, sheets of steel, bricks, stones, reinforced cement, and the prisons we constructed in the mind to keep others out require constant vigilance. *They can't come here.* Godlike, we have become an army of watchers, to anxiously guard ourselves against a world of strangers. (120-21、下線は引用者)

様々な立場の人々の視点をつなぐこの作品はまさに、地平線とそのかなたの水平線に思いをはせて、多方向の記憶を理解する想像力を読者に問いかけている。

５．おわりに

アレクシス・ライトは 2023 年 4 月に新作の長編小説 *Praiseworthy* を出版した。727 頁のこの長編小説を論じるのは、また別の機会としたいが、冒頭の章 'New Gods' に言及される「地球温暖化と地球規模のウイルス感染によってもたらされる惑星的な大災害」('planetary catastrophes of global warming or global viruses' 3) という句は、前作の長編小説『スワン・ブック』で描かれた地球温暖化と核汚染の近未来の世界を思わせ、また昨今の現実の世界、つまり、人新世の問題である気候変動とも関連して、今後も生じるかもしれない様々な新たなウイルスのパンデミックという「ウイルス新世」ともいうべき状況を映してもいる。

ライトと同じくメルボルン在住のアボリジナル作家トニー・バーチ (Tony Birch)は、気候変動について論じたエッセイ'Climate Change, Recognition and Social Place-Making' において、'Across northern Australia and throughout the Pacific, Indigenous communities may soon be displaced from country and suffer forced relocation. The loss of country will have a devastating impact on the spiritual, physical and social wellbeing of affected communities' (357-58) と述べ、カーペンタリア湾岸地域やノーザン・テリトリーなどのオーストラリア北部地域と太平洋島嶼部が共通して直面している気候変動の問題、土地を失って移住を余儀なくされることが、先住民コミュニティにもたらす精神的、物理的、社会的な影響に言及している。これはマーシャル諸島の詩人キャシー・ジェトニル・キジナー (Kathy Jetñil-Kijiner) が 'Tell Them'という詩で、'[…] we/ are nothing/ without our islands (167) と訴えていることでもある。今後、ジェトニル・キジナーの率いる Jo-Jikum のような NGO の活動と、オーストラリアの先住民作家たちの

実践的文学や社会活動との連携について見ていきたい。

※本稿は基盤研究(B) 「豪マイノリティ作家の 21 世紀の課題解決に向けたネオ・コスモポリタニズム文学研究」(研究代表者 : 加藤めぐみ、課題番号 22H00653) の助成を受けている。

引用文献

Birch, Tony. 'Climate Change, Recognition and Social Place-Making'. In *Unstable Relations: Indigenous People and Environmentalism in Contemporary Australia*, edited by Eve Vincent and Timothy Neale. UWA Publishing, 2016, pp.356-83.

DeLoughrey, Elizabeth. *Allegories of the Anthropocene*. Duke UP, 2019.

Kosugi, Sei. 'Survival, Environment and Creativity in a Global Age: Alexis Wright's *Carpentaria*'. *Indigenous Transnationalism: Essays on Carpentaria.* Edited by Lynda Ng. Giramondo Publishing, 2018, pp. 138-161.

Le, Nam. *The Boat*. Vintage, 2008.

Moffatt, Tracey. *My Horizon*. Edited by Natalie King. The Australia Council for the Arts, Thames & Hudson, 2017.

Wright, Alexis. *Carpentaria*. Giramondo Publishing, 2006.

----. 'Odyssey of the Horizon.' In Tracey Moffatt, *My Horizon.* Edited by Natalie King. Thames & Hudson, 2017, pp. 114-21.

----. *Praiseworthy*. Giramondo Publishing, 2023.

----. *The Swan Book*. Giramondo Publishing, 2013.

小杉世「環境芸術と政治 : 鉱山開発、エコテロリズム、地球温暖化、非核南太平洋」『ポストコロニアル・フォーメーションズXI : 言語文化共同研究プロジェクト 2015』大阪大学大学院言語文化研究科、2016 年 5 月、pp. 15-26.

――「Elizabeth M. DeLoughrey, *Allegories of the Anthropocene* (Duke University Press, 2019)」(書評)『ヴァージニア・ウルフ研究』第 37 号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、2020 年 12 月、pp. 150-155.

――「人新世のエコクリティシズム――Wu Ming-Yi、Alexis Wright、Amitav Ghosh を中心に」『ポストコロニアル・フォーメーションズ XIII : 言語文化共同研究プロジェクト 2017』大阪大学大学院言語文化研究科、2018 年 5 月、pp.73-85.

―― 'Trans-Pacific Imagination in the Anthropocene: The Work of Wu Ming-Yi and Alexis Wright', *The Southern Hemisphere Review*(『南半球評論』) vol. 34, March 2019, pp. 12-31.